
舞台神聖祝典劇パルジファル

坂田火魯志

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

舞台神聖祝典劇パルジファル

【NZコード】

N4859P

【作者名】

坂田火魯志

【あらすじ】

ロングヌスの槍を奪われその槍により傷を負つた聖杯城モンサルヴァートの王アンフォルタス。その彼を救えるのは清らかなる愚か者だけだという。その愚か者とは誰なのか。ワーグナー最後の作品を小説にしました。こちらにも掲載してもらっています。

<http://www.paintwest.net/>

第一幕その一

舞台神聖祝典劇 パルジフ

アル

深い森の中であった。しかしそのなかは陰気ではなく厳かな雰囲気の中にある。その中に一人の白銀の鎧と白いマントに身を包んだ年老いた騎士がいた。

兜で頭を覆つていて顔だけが見える。その顔は皺だらけで髪も真っ白である。目には厳かな光がある。

その彼がだ。己の傍にいる二人の小姓達に尋ねるのだった。それは低い声であった。

「朝が来たが」

「はい」

「また朝が」

「それでは御水浴場を見てきてくれ」

朝になつたのを確かめてからの言葉であった。

「いいな、王が来られる前にだ」

「わかりました、ではすぐに」

「今から」

「もう寝台輿の先駆が見えてきた」

見ればであつた。森の奥から彼と同じ姿の騎士達がやつて來ていた。老騎士は彼等を見ながら話すのであつた。

「すぐにな」

「はい」

小姓達は彼の言葉に従いその場を後にして、彼等に入れ替わりに

二人の騎士が来た。老騎士は彼等に対して問うのだった。

「アムフォルタス王はどんな御様子だ」

そしてさらに言つのであつた。

「早朝から御水浴とはあの女の薬草が痛みを和らげたのだな

「いえ、グルネマンツ様」

「それが」

騎士達は晴れない顔で彼の言葉に応えた。

「傷口が激しく痛まれた為」

「その為に一睡もできず」

「こう話すのだった。」

「それでは御水浴をと」

「そう仰いまして」

「そうか」

グルネマンツはそれを聞いてまずは辛い顔になった。

「やはりな」

「残念ですが」

「やはりあの傷は

「わかつてある」

グルネマンツは目を閉じ首を横に振つて述べた。

「あの傷を癒す方法は一つしかないのだ。どんな薬草でも水薬でも
だ

「効き目はありません」

「では

「何はともあれだ」

グルネマンツは「こりでは答えなかつた。その代わりに三つのだつ
た。

「御水浴だ」

「わかりました」

「それでは

騎士達も彼の言葉に応える。しかしここで小姓達が戻つて来てだ。
グルネマンツに対してもうことを告げてきたのであつた。それは。

「グルネマンツ様」

「あの女が戻りました」

「クンドリーがです」

「そうか」

グルネマンツはそれを聞いて静かに頷いた。すると黒いぼろぼろの服に伸ばし放題の乱れた黒髪の女がやつて來た。裸足で化粧氣もなくまさに野生だ。その女が來たのだ。

顔は整っている。黒い目の光は強く全体的に妖艶ですらある。だがその姿はまさに獸であった。顔色は朱を帶びた褐色で服の帯は蛇の皮だ。服はくるぶしの裾の辺りが乱れて破れている。その女がグルネマンツの前に来てだ。言つのであった。

「持つて來ました」

「これをか」

「はい、バルザムです」

「ひつ告げて彼にその水晶の容器を差し出すのであった。

「どうか」

「これは何処にあつたのだ?」

「想像もつかない遠方からです」

その強い光を放つ目と共に言つのだった。

「そこからです」

「また持つて來てくれたのだな」

「これ以上の薬はもう何処にもありません」

女はこうまで言つた。

「ですがまだご所望なら」

「いや、今はいい」

グルネマンツはひつ女に告げた。

「クンドリーよ」

「はい」

「今は休むのだ」

そして名前も呼んでみせたのだった。

第一幕その一

「御苦労だつた」

「それでは」

「王が来られる」

「悪いがそちらに向かう」

「はい、それでは」

「休むがいい」

やはり彼女には優しい言葉をかけるのだった。

「よいな」

「わかりました」

クンドリーはその場に前のめりになつて倒れ込んだ。そのうえで眠りに入る。泥の如く眠りその間にだ。グルネマンツは顔を王の一 行に向けるのだった。

「おいたわしや

「何といふことか」

「アムフォルタス王よ」

彼だけでなく騎士達や小姓達も悲しい顔で言つのだつた。見れば彼等と同じ白銀の鎧兜や白いマンドの騎士達と白い服の小姓達が持つその寝輿に乗つて黒い髪と茶色の髭の厳しい男がやつて來た。その顔は重厚であり威厳と氣品も兼ね備えている。そして寝ていても長身であることがわかる。彼がアムフォルタス王だった。

「誇り高い武勲優れた方が

「あの様に寝込まれて

「惨い話だ」

「よし」

「(+)で王は輿から身体を起こして述べてきた。

「(+)で少し休もう

「ここで、ですか」

「休まるのですね」

「そうだ。少し休もう」

周りの騎士や小姓達の問い合わせに答えての言葉であった。

「そしてだ」

「はい、そして」

「今は」

「激しい痛みの夜を明かした後は森の朝景色も一際素晴らしい見える」
その森の空気を感じながらの言葉だ。それは確かに爽やかで美しいものであった。

「あの神聖な湖の水を浴びれば」

「はい、御身体も」

「きつと」

「この身体を元氣付けてくれよ。痛みが和らげば苦しい夜の暗さも明るくなる」

「王よ」

ここでグルネマンツが彼の前に出て来た。そのつえで先程のクンドリーのバルザムを差し出してきたのである。

「どうかこれよ」

「それは」

「王の為にアラビアから届けられたものだ」ぞいます

「アラビアからか」

「その通りです」

王の前に片膝をついたうえで差し出していた。

「これをです」

「そういえばだ」

王はここで言うのだった。

「ガーヴァンもまた薬草を取りに行っていたな」

「はい、今は」

「行つております」

「クリングゾルの罠にかからなければいいが」

王は周りの者達の言葉に憂いのある顔で返した。

「それが心配だ」

「そういえばです」

「王よ」

騎士達が彼にまた言つてきた。

「あのことは」

「どうなのでしょうか」

「共に悩みて悟りゆく」

王は彼等の言葉を受けて静かに呟きはじめたのだった。

「純粹無垢の愚か者が」

「はい、その者です」

「その者は」

「今私の正体がわかる気がする」

「ここでこんなことを言つ王だった。」

「その者はだ」

「はい、その者は」

「何なのでしょうか」

「その男を死と呼ぶのだろうか」

沈んだ表情での言葉だった。

「我等は」

「その様なことは仰らす考えられないことです」

だがここでグルネマンツは王に厳しい言葉を進言するのだった。

「心が沈んではです」

「そうか。 そうだったな」

「そのバルザムにしろです」

そして彼は話をそのバルザムに移したのだった。 王の気持ちを暗いものから逸らす為である。

第一幕その二

「」の者が持つて来ました

「クンドリーがか」

「そうです」

その倒れ伏したままのクンドリーを指し示しての言葉であった。

「アラビアの果てからです

「そうか、済まぬな」

王はそれを聞いて申し訳なさに満ちた顔で述べるのだった。

「そこまでしてもらつてだ

「はい、それでは」

「このバルザムを使つてみよ」

王はそのバルザムを受け取つてから言つのだつた。

「クンドリー、礼を言つぞ」

「御礼なぞは」

クンドリーは獣の様に起き上がつて王に顔を向けて応えた。

「ただ。それを使って頂ければ」

「済まぬな、それではだ」

「はい、それでは」

こうして王達は湖に向かう。グルネマンツ達はそれを頭を垂れて見送る。そして一行が過ぎ去つてからだ。グルネマンツはクドリーに対してもた声をかけるのであつた。

「クンドリーよ

「今度は何でしようか」

「いつも済まぬな」

穏やかな目を彼女に向けての言葉だった。今彼女はまた顔をあげている。倒れ伏したままだつたが徐々に起き上がつてもきていた。

「本当にな

「ですが御礼なぞは

「こつも我々を助けてくれる」

「いつも彼女に告げた。

「常に誰よりも先に出て知らせをくれて誰よりも遠くに行つて王の為のものを持つて来てくれる」

「しかしこの女はです」

「魔女で異教徒ですが」

「それでもなのですね」

「そうであろう」

グルネマンツは周りの騎士や小姓達にも応えはした。

「しかしだ」

「しかし?」

「しかしながらですか」

「そうだ、しかしだ」

そして言つのだつた。

「今この女はこの聖地で暮らしているな」

「それは確かに」

「その通りです」

「そういうことだ」

穏やかな声での言葉であった。

「ではそれでいいではないか」

「いいのですか」

「それで」

「そうだ。いいのだ」

言葉はそのまま穏やかなものであった。

「心をあらためてこれまでの罪を購うものならばな

「それでは

「今は」

「ここにいてもいい。この女の贖罪は善行そのものだ。我々への助けはそのまま彼女を救つているのだ」

「しかしです。思つのですが」

「そうだな」

小姓達は顔を見合わせて言い合ひだした。

「この女がない時に」

「我等にとつて多くの苦難が起つています」

「これは」

「それはあるな」

「このことはグルネマンツも否定しなかつた。」

「この女がこの聖域からいない時には」

「はい、その時にです」

「常にです」

騎士達も小姓達も言つ。

「我等にとつてよからぬことが起つっています」

「常にです」

「わしも先の王もだ」

ここでグルネマンツはあらたな人物の名前を出したのだった。先の王といつのだ。

「ティートウレル王だが

「先王ですか」

「の方もまた」

「の方方が聖杯の城モンサルヴァートを築かれた時」

語るグルネマンツの目は遠くを見ていた。それは彼にとつてはまさに最初の喜びであった。

第一幕その四

「その時にはだ」「もういたのですか」「この女が」「森の茂みの中でもどろんでいた」
実際にその時の光景を語るのだった。
「その時既に死んでいる様で生氣もなかつたのだ」「そうした状況だったのですか」「この女は」「この女は」「そしてあの時もだ」
グルネマンツのその田に今度は怒りが宿つたのだった。
「あの不幸が起こつた時だ」「山に向こうにいる不貞の輩が」「王を傷つけたその時ですね」「その時にもこの女は森の茂みに倒れていた」「クンドリーを見ての言葉であった。
「御前はあの時何をしていたのだ」「何を、ですか」「そうだ。我等が槍を失つたその時にだ」「その時のこと話をすのであつた。
「御前は我等を助けなかつたのは何故だ」「私は助力はしません」
だがクンドリーはこう答えたのだった。
「それは決して」「しないといふのか」「はい」「まさにそりだといふのである。
「その通りです」

「そうなのか」

「この女にあの槍を奪い返せといつのは
できないのでしょうか」

「それだけ誠実で力もあるのなら」

「それはまた別の話だ」

しかしグルネマンツは暗鬱な顔に戻つて首を横に振つたうえで騎士達や小姓達に答えた。

「それはだ」

「違うのですか」

「それは、だ」

「あの槍をあの男から奪い返すのは誰にもできはしない」

「誰にも」

「できないと」

「そうだ、できはしない」

こう語るグルネマンツだった。

「主の傷の奇跡がこもつたあの神聖な槍はだ」

「恐ろしことに」

「今は」

「世にも汚れた者が手に入れてしまつてゐる」「
グルネマンツだけでなく他の者達も嘆いていた。

「その通りです」

「恐ろしいことにです」

豪勇至極なアムフォルタス王があの槍を手に妖術師クリングゾル
を討ちに向かつた時に

グルネマンツの声の嘆きはさうに深まる。

「誰がそれを阻止し得たか」

「それは」

「とても」

「できはしなかつた」

こう語るしかなかつた。

「恐ろしい美女に魅了され陶然としたその時にだ」

「槍を落とされたと聞いていますが」

「誰も見ていませんが」

「全てあの男の魔力だった」

グルネマンツは自然にその手を閉じていた。

「そう、全てはだ」

「そしてその魔力によつてあの男は」

「槍を」

「わしが駆けつけた時には槍は既にあの男の手にあつた」

「そして王は倒れられていて」

「そうしてですね」

「その通りだ」

今度は己の言葉に悲しみを込めるグルネマンツであつた。

「わしは奮戦し血路を開き王と共に逃れたがだ」

「王はその時に」

「あの傷を」

「王の脇のあの傷は火の様にうずき」

言葉には嘆きも入つていた。複数のそうした感情の中での言葉であった。

第一幕その五

「それは一度と閉じよつとはしないのだ」

「そうなのですか」

「そして今も」

ここで小姓が一人来た。先程グルネマンツが送つたあの一人の小姓だ。グルネマンツはすぐに彼等に對して心配する顔で問うのだった。

「それで王は」

「はい、お元気になられました」

「御水浴とバルザムで」

「左様か」

それを聞いてまずは少し安心したグルネマンツだった。しかしであつた。

「だが。それもだ」

「はい、傷は」

「完全には」

「仕方ないことだ。それは」

「ところでなのですが」

ここで騎士の一人が彼に問うてきた。

「宜しいでしょうか」

「何だ?」

「グルネマンツ殿はあの男の顔を御存知なのですね」

「このことを問うたのである。

「それは」

「そうだ。知つてゐる」

その通りだというのであった。

「それはだ」

「ではあの男のことば

「それも御存知なのでしょうか」

「うむ、知つてある」

「彼自身のことについても知つてゐるところである。

「それもだ」

「では一体」

「どういった男だったのでしょうか」

「信仰篤い勇士であられる先王こそだ」

グルネマンツはここでまたティートウ・レルのことを話に出した。

「あの男をよく御存知であられる」

「先王がですか」

「よく」

「そうだ。御存知であられる」

「こつ話すのだった。」

「その理由はだ」

「それは」

「どういったものでしょくか」

「野蛮な敵達が策略や暴力を以てこの神聖な信仰の国を脅かすに至つたその時にある厳かな神聖な夜に先王の頭上に主からつかわされた使者達が現われ」

「使者たちにより」

「あれが」

「その通りだ。あの聖杯」

槍、そして聖杯。二つのものが今揃つた。話の中だが。

「主が最後の晚餐で使われ十字架にかけられた時にその至尊の血を受けた」

「あの神聖にして崇高な杯」

「あれこそが」

「そうだ。そこに至尊の血を流させた槍をも流させて」

グルネマンツは話を続けていく、

「あの受難を作つた二つを先王に『えて下さつたのだ』

「それこそが

「我がモンサルヴァートの」

「先王は」の一つの聖なるもの為にモンサルヴァートを建てられたのだ

「そして我々は」

「そこに仕える」

騎士達も小姓達も今感じ取っていた。」のことを。

「そして護る」

「それが役目ということなのですね」

「そうだ。聖槍と聖杯に仕える御前達はだ

グルネマンツもその通りだと話すのであった。

「罪深い者達が見出せないよつすな道を辿ったからこそなれたのだ。

ここに至るにはだ

「純潔な者だけが

「その者だけが」

「その通りだ。そうした者しか許されないのだ」

まさにそうだというのだ。

「我等は救済という最高の務めの為に聖杯の靈験を受けられる

「その通りですね」

「我々はその為に」

「わかるな。しかしグリンギルはだ」

あらためて彼のことが話される。

第一幕その六

「聖杯騎士の仲間になることを求めどれだけ務めよつともそれはできなかつた」

「それは何故でしようか」

「一体

「まず異教徒だつた」

「それが理由の最初だつた。

「そして心に邪なものが強かつたのだ」

「邪なものがですか」

「それが」

「そうだ。それが強い為にだ」「こう話していくのであつた。

「彼はその異教徒達の間で罪を犯し過ぎたのだ」

「そしてその結果ですか」

「モンサルヴァートに入られなかつた

「遂にはあの山の向こうの谷間に移り住む様になり」

「今そのクリングゾルについての話であつた。

「そこで懺悔を心掛け聖者になろうとした」

「それでもなのですね」

「結局は」

「己が身に宿る罪を絶つ力がない故に」

語るグルネマンツの顔が歪んだ。

「罪深い手を我と我が身に加えて在任となつたのだ」

「何と・・・・・・」

「その様なことを

「何をしたかはわかるな」

グルネマンツはあらためて周りの者達に問つた。

「あの男が何をしたかは

「はい、よく

「それは」

「その通りだ。そのうえで聖杯グラールを欲したのだ」

「恐ろしいことです」

「罪を犯しながら」

「しかし先王は」

ティートウレルがどうしたかであった。

「それをはねつけられた。あの男はそれに怒りあの場所でだ」

「あの場所を作ったのですか」

「墮落と退廃のあの場所を」

「その通りだ。そうして今に至るのだ」

「こう話すのであった。

「邪悪な魔力を生かすべき方策を巡らし遂にその邪な考えを見出したのだ」

「あの園はそのうえで出来上がったのでしたか」

「あの男のそうした経緯のうえで」

「魔性の美女達が多くいて」

「今度はそこがどういった場所かの話であった。

「クリングゾルはそこで聖杯の騎士達を待ち」

「我等を」

「そうして」

「邪悪な快樂と地獄の恐怖の中へ騎士達を引き込もうとした」

「彼等にとつて恐ろしい話はさらに続く。

「誘惑された騎士達は既に数多い」

「嘆かわしいことに」

「それは」

「戻つて來ることもなくだ」

「そこに留まつているといふのである。

「先王は御高齢故にアムフォルタス王に譲位されていた」

「そして王が」

「あの男に対して」

「魔の禍根を断ち切らうとされたが」

「槍があの男の手に」

「そういう次第だったのですか」

「そうだ。あの男は槍を手に入れてしまった」

聖槍をだ。持っているのであつた。

「そうして今に至るのだ」

「では何としても」

「あの槍を」

「聖槍を奪われ孤影悄然たる聖杯の前で」

グルネマンツの話がここで変わつた。

「王は熱心な祈りを捧げながら懼く御心で救いの験を切願された」

「そうして」

「何があつたのでしょうか

「その時のことだ」

また語るグルネマンツであった。

「天の光が聖杯から出たかと思うと」

「そして」

「何が

「神聖な夢幻のお姿が浮かび出て」

「主の」

「それがなのですね」

「その通りだ」

まさにその主が出て告げたというのである。

第一幕その七

「王に對していつ告げられた」

「何とでしようか」

「そのお告げは」

「それは鮮やかに読み取れる神託の文字だつたのだ」「
グルネマンシの語るその言葉にからに峻敵さが宿っていた。
共に悩みて悟りゆく、純粹無垢な愚か者」
まずはこの言葉であった。

「かかる者を待て。我の選べる者なれば」

「共に悩みて悟りゆく」

「純粹無垢の愚か者がですか」

「そうだ、その者がだ」

「こう語るのであつた。

「その者こそが王を救われるのだ」

「清らかな愚か者こそが

「王を」

騎士達も小姓達のその者のことを思ひざるを得なかつた。そして

その時だつた。

「何とこうことをしたのだ」「

「何と酷いことをだ」

湖の方から声がしてきた。

「早く捕まえろ」

「あの若者をだ」

「どうしたのだ?」

話し終えたグルネマンシはそちらに顔を向けた。

「一体何があつたのだ?」

「あそここ」

「白鳥が

「白鳥が傷ついている

「馬鹿な」

グルネマンツはそれを聞いて眉を顰めさせた。

「神聖なこの場所で鳥を撃つなどとは

「はい、これは一体」

「どういうことでしようか」

白鳥は傷ついていたが何とか無事だった。小姓の一人が彼を拾い刺さっている矢を抜きそのままに別の小姓達が薬や包帯を出して手当てにかかった。これで何とか難を得た。

「無体なことをする奴がいるものだ」

「一体誰がしたのだ」

「誰がだ」

騎士達も眉を顰めさせずにはいられなかつた。

「この様なことを」

「誰がしたのだ」

「それはです」

湖の方から一人の騎士が来てグルネマンツ達に話してきた。

「この白鳥が湖の上に輪を描いて飛んでいるのを王が吉兆として喜

んでおられたのですが

「それがなんか」

「はい、そうです」

「この男です」

「この男がしました」

湖の方から多くの騎士達や小姓達がやつて来て口々に言つ。見ればその中央には褐色のみすぼらしい上着にズボンの背の高い若者がいた。波うつ豊かな金髪を猛々しく伸ばし後ろに撫で付けている。彫のある青い目は今は虚ろな光を放つてゐる。顔は引き締まつてゐるが何もわからない様である。唇は小さく鼻が高くしつかりとした形だ。そして身体は騎士達と比べても全く遜色ないまでに引き締まつてゐる。

騎士達や小姓達は彼をグルネマンシの前に引き立てた。そいつで言った。

「この男が射ました」

「それがこの弓です」

「これによつてです」

一人が『』をグルネマンシに見せながら語る。

「そして矢もです」

「これによつてです」

「白鳥を射たのは御前なのか」

「空を飛ぶものならどんなものでも射てみせる」

若者はグルネマンシの問いに胸を張つて答えた。高く澄んだ強い声であつた。

「そう、どんなものでもだ」

「御前がしたことにだ」

グルネマンシは若者を厳しく咎めながらさりとて聞いた。

「何も思わないのか」

「この男を罰するのだ」

「このモンサルヴァートにおいてかつてなかつたことだ
グルネマンシは厳かに語つた。

第一幕その八

「上へしたことはまだ」
「その通りです」
「何という男なのか」
「御前はだ」
グルネマンツは若者をさらに責めた。
「この神聖な森の中で何をしたのかわかつていいのか」
「何をとは?」
「静かな平和が御前を囲んでいたな」
「平和を」
「そうだ、平和をだ」
「いつも若者に話していく。」
「その中でこの森の鳥や獸達はどうしててきた」
「それは」
「そうだな。御前に危害を加えることはなかつた」
「まずはここから話すのだつた。」
「それはだ」
「それはその通り」
若者はまだぼうつとしたままではあつたが答へました。
「僕に何も」
「御前を親しげに、穏やかに迎えてくれたな」
「その通りだつた」
「この誠実な白鳥が御前に何をしたか」
その傷つき悲しい顔になつてゐる白鳥に顔を向けての言葉だつた。
「相手の雌を探しその妻と共に湖の上で弧を描いて飛んでいたな」
「そうしていた」
「しかし御前はだ」
「しかし御前はだ」
若者をさらに咎めるのだつた。

「その白鳥を射たのだ。何の感嘆も持たずにだ

「そうだったんだ、僕は」

「そしてだ」

「さらに話す若者だつた。

「腕白小僧の弓矢遊びの気持ちしかなかつたのか」

「僕は」

「我々には可愛い鳥だ」

「今度は白鳥をいとおしげに見ていた。

「これを見ろ。白鳥の傷を」

「その傷を」

「まだ血が残つてゐる。身体も弱くなり羽根も汚れ
まさにグルネマンツの言葉通りだつた。

「悲しい目は。わかるな」

「それは」

「御前の罪の深さにわかつたな」

「いつ若者に話していく。

「何故こんなことをした

「罪なんて知らなかつた」

「だが彼はこう言つのだった。

「そんなことは」

「それでは何処から來た?」

「わからない」

「では父親は誰だ?」

「それもわからない

「言葉は同じであった。

「それも」

「では誰から教わり」「ここに來た」

「それもわからない

「では名前は?」

「名前は沢山あつた

返答は変わった。しかしだった。

「けれど一つも覚えていない」

「つまり何もわからないのか」

グルネマンツはこのことだけがわかつた。

「つまりは」

「何も」

「これだけの愚か者はクンドリーの他には知らん」

ここでまた倒れ伏したまま寝ていてるクンドリーを見るのだった。

「まあい。それではだ」

「はい」

「王の元へ」

小姓達がグルネマンツの言葉に応えた。

「今から行きます」

「そして白鳥は」

「湖で癒されるだろ」

グルネマンツは穢やかな口調で述べた。

「だからだ」

「はい、それでは」

「白鳥もまた」

小姓達も騎士達も向かう。後に残つたのはグルネマンツにクンドリー、それに若者の三人だけになつた。グルネマンツはまた若者に對して言つ。

第一幕その九

「御前は何も知らないのか？」
「知らないのかつて？」
「言い換えれば何か知つてているか？」
「こう問うたのである。
「何か知つていることを言つてみるのだ」
「母さんの名前を」
それは知つているといつのだ。
「知つている」
「ではその名前は何だ？」
「ヘルツュライデ」
「」の名前を出すのであつた。
「そして僕は森の中や荒野で育つた」「
ではその」は誰に貰つた
「自分で作った」
「そうだといつのだ。
「これがあれば荒鷺達を森から追つ払える」
「そうして何も知らないまま育つたが」
グルネマンツはあらためて若者を見た。その彼は。
「品も悪くないし家柄もいいようだな」
「品？家柄？」
「御前の母は何故もつとましな『矢を使わせなかつたのか』
「」の子を産んだ母は
「」でだつた。クンドリーが不意に顔をあげてきた。そして若者を鋭い目で見ながら少しづつ話してきたのであつた。
「父ガムレットが死んだ後だつた」
「ガムレットか」
「知つているのか」

「名前は聞いたことがある」

それはグルネマンツも知っている者だった。

「名高い騎士だつたな」

「だが死んでしまつた」

「そうだつたな」

静かに領いて答えたグルネマンツだった。

「だがそれも神の御心だ」

「母は我が子が父の様に勇士になり死ぬことを恐れた」

そのヘルツエライデに関する話だつた。

「そしてその為に」

「どうしたというのだ?」

「全ての武具を遠ざけた」

そうしたというのだ。

「人気のない荒野の中で愚か者になれと育てた」

「そしてか」

「そや。 そうしてこの若者を育てたのだ」

「そうだつた」

若者はここで思い出したようにして言葉を出してきた。

「僕を見た」

「騎士達をだな」

また言う彼だつた。

「それをか」

「僕もああした風になりたいと言うとその人達は笑顔を向けてくれた」

その時のことを思い出しながらの言葉だった。

「僕はその人達を追い掛けてここまで來た」

「この聖地にか」

「そうだ。 ここに來た」

「うぐルネマンツに話す。

「度々暗くなつて明るくなつた」

「夜と昼か」

「弓は獣や大男の為に使つた」

「その通りだつた」

クンドリーは完全に起き上がつた。そのうえでグルネマンツを若者の間に来てそのうえでまたゆつくりと話すのであつた。

「どんな獣も巨人も盜賊も」

「この愚か者は倒してきたのか」

「弓でも力でも適わなかつた」

そうだつたとグルネマンツに話すのだ。

「皆彼を恐れた」

「僕を恐れている」

これはパルジファルには思いも寄らないことだつた。話を聞いても少し戸惑つっていた。そしてそのうえで言つのであつた。

「誰が」

「悪人達が」

「それなら」

それを聞いてまた言つ若者であつた。やはり何も知らない顔である。

「僕が倒してきたのは悪人達だつたのか」

「その通り」

「では善人は」

パルジファルはここでそれとは逆のことについて考えた。

第一幕その十

「誰なんだ」

「御前の母」

クンドリーは一皿で述べた。

「御前は母上のところから出たが彼女は御前のことを心配し悲しんでいる」

「母さんが」

「そう。そして」

「そして?」

「母は死んだ」

「この若者に告げた。

「もういない」

「いないのか」

「そう、私は見た」

クンドリーは若者に対しても話していく。

「彼女が息を引き取るといふを」

「母さんが」

「そして私に御前を頼むと言つてきたのだ」

「そんな、母さんが

「落ち着くのだ」

グルネマンツは話を聞き終えて肩を落とした若者の傍に来た。そうしてそのうえで彼に対しても優しく言つのであった。

「今は」

「母さん・・・・・・」

若者は涙を落としそうな顔になつていた。

「そんな。僕は」

「悲しみはわかるが

グルネマンツは彼を慰める。クンドリーはその間に傍の泉に向か

い角杯の中に水を汲んできてそのうえで若者に差し出したのだった。
その前に彼の頭にその水を少しかけた。

「水を」

「それまだ」

グルネマンツはまた彼に語つた。

「聖杯の恵みの方式だ」

「聖杯?」

「悪を報いるには善を以て行う

グルネマンツは語つた。

「そうしてこそ悪は清められる」

「私は

だがクンドリーはそれを聞いて語つのだつた。

「そんなことは決して」

「しないというのか

「もう休みたい」

そしていつも語つのであつた。

「今は

「ではどうするところなのだ?」

「またここで」

グルネマンツの言葉に応えながらであつた。そのうえで再び身体

を仰向けて寝かせてであつた。そのうえでゆつくつと眠りに入るの
であった。

ここでまた王の寝輿が来た。騎士達や小姓達も一緒だ。そしてそ
のうえで若者に對して語つのであつた。

「王が城に戻られる」

「城に?」

「そう、城に」

戻るといふのである。

「田も高く昇つた」

「田も」

「御前を連れて行くところがある」

「それは何処なんだ?」

「聖餐の席だ」

「そこにだとこいつのだ。」

「御前にその食べ物や飲み物を惠んで下さるだらう」

「聖杯?さつきも話に出たが」

「それは言つ」とはできない

「このことは答えようとしてない若者だった。

「それはだ

「答えない」

「そう、答えない」

また言つ彼だった。

「しかしだ

「しかし?」

「御前の身が聖杯に仕えるよう選ばれてこるのはなら」

「その場合は?」

「聖杯も御前の傍を離れない」

「そうなのか?」

それを聞いてもであつた。若者には実感の沸かないことであつた。

第一幕その十一

「それが僕に」

「わしは御前がわかつたような気がする」

「彼を見ながらの言葉だった。」

「聖杯に通じる道はだ」

「その道は？」

「國中にただ一筋もなく」

「いつも若者に話すのだった。」

「聖杯自ら導き寄せようとしない限りはだ」

「そうしない限りは」

「誰も近付くことはできない」

「そうだといふのだ。」

「誰一人としてだ」

「僕は碌に歩いていないのに」

「これは主觀だった。」

「もう遠くに来た氣がする」

「それがわかるのか」

「何となく」

「ここではだ。行くぞ」

「うん」

グルネマンツは若者に共に行くように促す。彼もそれに応え一人で進む。そのうえで歩いていくとだった。舞台は徐々にではあるが森が消えて岸壁の間に門が開けてきた。その門内に入り白い美しい宮殿の中に入っていた。

そしてその宮殿の中は壯厳で上から白い光が入つてきている。白い光は白い壁と立ち並ぶ円柱、それに銀色に輝く床に白い宮殿を歩いてだ。そのうえでさらに中に入つてきていた。

そうしてだ。その中を進みながらさうに話すグルネマンツであつ

た。

「ここではだ」

「ここでは?」

「時間が空間に変わるものだ」

「いつも彼に話すのだった。」

「ここではだ」

「そうなのか」

「わしに見せてもらいたい」

「また若者に告げた。」

「それをだ」

「僕が何を見せるんだ?」

「御前が愚か者で純粋ならばだ」

「若しそうであればというのだ。」

「どんなものが御前に授けられているのかをだ

「僕が見せる?」

「そうだ。それをだ」

「いつも話すのだ。」

「それを」

「そうだ、それをだ」

「また彼に話した。」

「いいな」

「僕には何もわからない」

「実際に彼はわかっていないかった。何もだ。」

「それでもなのか」

「そうだ、それでもだ」

「まだ若者に言つのであった。」

「来るのだ」

「ここに」

「そう、今来た」

歩ければそれだけで辿り着いたのだった。そこは柱が連なる広間

でやはり白い光に白と銀の世界が映し出されている。天井はアーチになつてゐる。その左右の扉が開かれると騎士達が来た。そうしてそれぞれ集つて言つのであつた。

「今こそはじめよ!」

「朝の儀式を」

「それを」

「こう言つてであつた。それぞれ集まつていた。

そこに今にも倒れそうな老騎士が来た。他の騎士のそれと比べて雰囲気が違つていた。グルネマンツと同じく白い髪を生やしている。その彼がその騎士の中央に横たえられその上体を起こしていゝ王に言つてきた。

「我が子アムフォルタスよ」

「父上ですか」

「そうだ。そなたの務めを果たしているか」

「こう彼に問うのであつた。

「それはだ。どうなのだ?」

「それは」

「わしは今日も聖杯を仰ぎ生きながらえることができるのか」

「こう言つのであつた。

「それとも主に導かれる」となく去ることになるのか

「しかし私は」

「だがここで王は頃垂れて父王に言葉を返した。

「父上、どうかもう一度」

「どうしたというのだ?」

「」の務めを果たしてくれぬでしょうか

「これが彼の言葉だつた。

「どうか私に代わつて」

「それは何故だ?」

「私はもう生きることを望んではいません」

「顔を俯けさせての言葉だつた。

「ですから

「それはできん」

しかし王の返事は悲しいものだった。

第一幕その十一

「わしもまた歳を取り過ぎた」「だからだというのですか」「そうだ。そなたしかいない」
こう言つて王に返した。
「そなたが奉仕して己の罪を講つのだ」「その罪ですか」「そうだ。だからこそ聖杯を」「わかりました」「それでは」「先王の言葉を聞いてそのつえで小姓達が動こつとする。しかしであつた。」「待て?」「待て」「開けないのですか」「そうだ」「その通りだと小姓達に言つたのは王だった。「この世に誰一人として我が苦しみをわかってくれる者はいない」「だからだと」「だからだと」「そう仰るのですか」「この苦しみはそなた達を喜ばせる聖杯によるもの」
こう言つて開けさせようとしない。
「呪いを受けてその務めを果たすべき身の苦しみ」
ですが
「それでもです」
「許してくれ」
「我々は」
「許してくれ」
だが王はそれをあくまで拒むのだった。

「この苦悩に比べればどれだけの傷も痛みも何程のことがあるか」「だからなのですか

「それは」

「許してくれ

また言つ王だった。

「今更迷れようもなく父上から受け継いだこの悲痛な役目

「悲痛ですか

「王であることが」

「そのことが」

「あらゆる人々の中で無類の罪深い身であり

それが己だというのだ。

「至高の宝である聖杯に奉仕し

「ですが王」

「それでもそれは

「わかつていてもだ」

それでもだというのである。

「純粹な者達に向かい聖杯の祝福が舞い降りるよう祈らなくてはならない」

「それが王の務めです」

「ですが。なのですね」

「それでも」

「王は」

「辛いのだ」

嘆き悲しみ、そのものの言葉だった。

「恵み深い神よ、私の罪への報いなのですね」

天を見上げての言葉だ。

「神の御許へ」

「そこへ」

「行かれたいと」

「そしてなのですか

「そのつえで」

騎士や小姓達の言葉も続く。

「今ですか」

「もう」

「神が清められたその御言葉を憧れ深く願う」
これが彼の言葉だ。

「魂の奥底から救いを仰ぐ懺悔を続け」

「そうして聖杯は」

「今は」

「一筋の光が神聖な器の上にさし入る」

王の言葉がさらに出される。

「被いも取れることになろう」

言いながらだった。その前にある聖杯を収めた銀の箱を見るのだった。

「そのつえでだ。彼はさうに言つのであった。

「そうすると」

「そうすると」

「一体？」

「聖杯に宿る神意が凜然と力強く灼熱するのだ」

王は憂いの中でもうらに続ける。

「幸豊かな享受の苦痛におののきの上の上なく神聖な血の気が」

「ですが王よ」

「それは」

「わしの心臓の中に流れ込んで来る思には、
さうに言つていぐ。

第一幕その十三

「罪深い血は逆流し酷く恐れ怯えてだ。罪深い欲求の世界の中へ
死に」

「それを」

「この逆流の血はせき止める門をもあらたに超えては流れ込もうと
する」

「そしてさらに話していく。

「この傷からあふれ出るものは他ならないあの槍で主が傷付けられ
た場所にある」

「あの主とですね」

「確かにそうです」

「それは」

「私はわかる。あの地で主が聖槍で傷を受けられた時に血の涙を流
し苦悩の神聖な憧れのうちに人の汚れた罪を悲しまれたことを」
今それがわかると。話すことができた。

「この聖なる地で私は罪深い血を流し至尊の宝を管理し救世のバル
ザムの保護者である」

話が続く。

「私の罪深い血は憧れの泉の中から絶えず流れ出るのに如何なる贖
罪もそれを鎮めてはくれぬ」

その話はまさに嘆きそのものであった。

「慈悲深い神よ、その慈悲を。我が継承の務めに免じてこの傷口を
塞ぎ聖なる死を「え御身の為純潔な身として蘇らえらせ給え」

「共に悩みて悟りゆく」

「純粹無垢の愚か者」

騎士と小姓達はさらりと話していく。

「かかる男を待てと」

「我の選べる男よ」

「ですから王よ」

「そうです」

彼等はその王を円形に取り囲んでいる。そのつえで告げてきていた。

「ですからお心を安んじられ」

「今日はお勤めを」

「わかった」

それには止むを得ないことにした顔で頷く王だった。
そうしてだ。彼はさう言ひたのであった。

「開ぐがいい」

「はい、それでは」

「そのまま」

その箱が開かれそのつえでそこから見事なまでに白銀に輝くその
杯が姿を現わした。それはすぐに王の前に差し出されたのだった。
王はそれもまずは頭を下げ黙祷を捧げてから広間全体にその杯を
見せよとする。その杯を手に持つてそれを周囲に見回せるのだ
った。

「我が肉を取れ」

「我が血を受けよ」

「我等の愛に」

「我を偲ばん為に」

「我が肉を取れ」

「聖杯についていく騎士と少年達であった。あの主の言葉だった。

聖杯から目も眩む様な紫紅色の光を放ち広間の中を柔らかく照ら
す。騎士達も小姓達もその光を受けて恍惚となる。先王もそれを浴
びて言つ。

「この聖なる喜び。主は今日何と素晴らしいお心で私等に与えてくれるのか

「はい、確かに」

「今は」

他の者達もその光の中で話していく。

「この喜びは他の何にも

「代えられません」

「どのようなものも」

「何があろうとも」

やがてそれが收められ広間は元の白い光に包まれたものになった。

小姓達がその中でも囁つのであった。

「最後の聖餐の葡萄酒とパンを」

「かつて主は共腦の愛の力を通じて」

「自ら流される血に変えられ」

「自ら捧げる血に変えられた」

その最後の晚餐のことであった。

「今日汝等を元氣付ける為」

「幸深き慰めの愛の精靈は」

今度は若い騎士達が囁つ。

「聖なる恵みの血と肉を」

「汝等に注がれたる葡萄酒に変え」

「今汝等の取るパンに変えられる」

「パンを取れ」

この言葉が騎士達から出された。

第一幕その十四

「昂然としてそのパンを
「肉の力と強さに変えよ」
「死に至るまで誠実に」
「如何なる労苦にも揺らぐ」となく
「救世主の技を実現せよ」
「今こそ」

そして今度は。

「葡萄酒を取れ」
「新たにその葡萄酒を」
血であった。

「命の燃える
「血に変えよ
「協力を喜び
「兄弟の誠実さを保ち
「幸深き勇気を奮い
「そして戦うのだ」
」」つ述べられていつてであった。

「信仰に幸あれ」
「愛と信仰に幸あれ」
「愛に幸あれ」
「信仰に幸あれ」
「信仰に幸あれ」

騎士達の言葉が続く。そのうえで肅然と広間を後にする。王は暫くそこにいた。だがその顔は次第に俯いていき倒れるようになつた。小姓達が王を気遣つて集まるがその脇から赤いものが滲み出でていた。王はそのまま連れて行かれる。そして若者とグルネマンツだけになつた。だが若者は胸に手を当てて王を同情する顔で見ているだけであった。

グルネマンツは彼の傍に寄りだ。難しい顔で問うのだった。

「何かわかつたか？」

「何かつて？」

「今見たものがわかつたか？」

「こう問うのだった。

「御前が今見たものがだ」

「一体何を

戸惑つた顔での返答だった。

「僕が何を」

「そうか。やはり御前は只の愚か者か」

グルネマンツはそこまで聞いて残念そのものの声で述べた。

「所詮は」

「僕は一体

「行ぐがいい」

その諦めた声での言葉だった。

「好きな場所に行くがいい」

「ここを去る」

「その前にパンと葡萄酒位はやろひつ

「これは彼の気遣いであつた。

「しかしだ。腹の中に入れたならばだ

「ここを去る」

「そうだ。その時には何も傷つけんな」

先程の白鳥の話である。

「わかつたな」

「うん、じゃあ

「共に悩みて悟りゆく

「純粹無垢の愚か者」

またこのことが言われた。

「信仰に幸あれ

「愛に幸あれ」

#若者はその言葉の中を去つてこぐ。今聖者はいなかつた。

第一幕その一

第一幕 目覚め

魔法の城は淫靡な趣さえあつた。

色は暗灰色だがその中に紅い花が咲き誇り紅や緑の透き通る服を着た二、三の如き娘達が艶やかに舞つてゐる。騎士達がその中で墮落した顔をしている。城の主クリングゾルはアラビアの服を着て黒く濃い鬚を生やした大柄な男であつた。彼は己の玉座に座してままで周りに控える騎士や美女達に言つのだつた。

どの者達も目は虚ろだ。その虚ろな目で彼の言葉を聞いていた。

「時が来た」

「はい、時が」

「今こそ」

「そうだ。来たのだ」

「この周りに語るその声は重厚だが妙な高さがある。それこそが彼の声だつた。

「この城はあの愚か者を引き寄せたのだ」

「愚か者といいますと」

「またモンサルヴァートの騎士が一人」

「違う」

ところがであつた。ここで彼は言つのだつた。

「あの者達とはまた違つ

「といいますと」

「それは」

「子供の如き歓声をあげこの城に近付いて来る」

まさに遠くを見る目であつた。

「そしてクンドリーだが」

「あの女もですか」

「今は俺の魔法で眠らせてこむ

そうしていりとこいのうのだ。

「だがすぐに起き上がりせられた。その時こそだ」
ここで右手を前に出して掲げてみせた。するとであつた。
それだけで何かが起ことつたのだった。

「出るのだ」

彼は言った。

「そしてここまで来るのでだ」

「あの女が」

「ここに」

「そうだ。来るのだ」

「いつも言つのである。

「名無しの御前を主が呼んでいる」

「そしてさらに告げるものは。」

「御前はかつてヘロー・ディアスといいかつてはグンドリュッギア、
そして今はクンドリーといったな」

そうした名前を出していくのであつた。

「御主人様が御呼びだ。出て来るのだ」

そう呼ぶとであつた。今遂に来たのであつた。

クンドリーは部屋の中に蜃氣楼の如く現れた。そのうえで言つて
であった。

「私を呼んだのか」

「そうだ」

まさにそなだと答えるクリングゾルだつた。

「俺が御前を呼んだのは」

「それは何故」

「理由は一つしかない」

こう返しもした。

「御前が俺の奴隸だからだ」

「私はそうなつた覚えはない」

「またあの城に行つっていたのか」

「ここで忌まわしげな顔になるクリングゾルだった。

「モンサルヴァートに」

「あの城が私の本来の居場所」

「あの場所が何だというのだ」「

声もまた忌まわしげなものだった。

「あの様な白がだ」

「あの城にやがて現れる」

クンドリーは空虚な声で彼に返す。

「私をこの永遠の苦しみから解き放つてくれる清らかな愚か者」

「またそいつなのか」

「彼を求めて」

「だからだといふのである。

「私は」

「あの城の者達は何も知らない」

クリングゾルの今の言葉には嫉妬もあつた。

第一幕その一

「その様な者達が何だというのだ。
「私の呪い。憧れ」
「あの城の無知な騎士達に憧れるのか」
「私は何時か救われる」
ここでは話が噛み合つていなかつた。しかしそれでもお互いに話すのであつた。
「だからこそ」
「好きにしろ。それではだ」
「それでは」
「あの者達は御前に何の見返りも出さない」
そもそもそうした発想が彼等にはなかつた。
「だが俺は違う」
「違つ」
「そうだ、違つ」
まさにそうだといふのである。
「俺は違う。御前に褒美をうりやんとやる」
「そんなものはいらぬ」
「御前はかつて俺に槍を授けてくれた」
「このことを笑いながら話すのだった。
それに見返りをやつたな。多くの黄金を
「私にとつて黄金は何の意味もないもの」
「黄金はこの世を動かすものだ」
だが彼はこう言つのだった。
「それは覚えておけ」
「そして今度は？」
「また言つ」
「今はあえて言わないのだった。

「それではだ」

「その時は」

「動かしてやる」

これが彼の言葉であった。

「わかつたな」

「私はもうそれは

「御前は以前聖者にならうとした」

クリングゾルはその時のことも話しだした。
「だがそれはどうなつた」

「それは」

「御前は恐ろしく苦しき立場の中にある」

今度はこんなことも言つのだつた。

「抑えきれない憧れの苦しみや凄まじい衝動の地獄の欲望や

「それは」

「そういうものの中にある」

それが彼女だというのである。

「御前はその中に必死に抑え込んでいるがだ」

「私はそれでも」

「嘲笑や軽蔑は御前はかなり受けってきたな」

「・・・・・・・・」

「沈黙が何よりの証だ」

クンドリーが黙つたのを見てさらに言つてみせたのである。

「嘲笑や軽蔑はあの男が受けた。あの王がだ」

「あの王が」

「頭の高いあの男から槍を奪つた。奴等はやがてそのまま朽ちる」
モンサルヴァートで何が起こっているのかはもうわかつっていたのだ。

だ。

「そしてやがて聖杯も俺のものとなるのだ」

「私はもう疲れた」

クンドリーの声が相変わらず虚ろなものであった。

「私はもう疲れた」

「誰もが弱い。そして私も」

「弱ければどうだというのだ？」

「疲れて動けなくなつてしまつて」

「その虚ろな言葉を続けていく。

「眠つてしまいたい。それが永遠の救いになれば」

「御前に抵抗できる者ならばそれもできよう」

クリングゾルは嘲りを込めて彼女に告げた。

「しかしだ」

「しかし」

「今ここに来る若造でそれを試してみるか

「あの若者とは」

「見ている筈だ、あの惡々しい場所で」

モンサルヴァートの森のことすら話に出そつとしない。

「御前もまた」

「あの若者が。何も知らない若者が」

「来たな」

クリングゾルは玉座にいながら全てを見ていた。

「遂にか。来たな」

「来た、遂に」

「そうだ、来たのだ」

それを見ながらクンドリーに語つてみせる。

「あの若造が」

「私は今度は一体」

「よし、それではだ」

クリングゾルは早速動いた。

第一幕その二

周りの騎士達を見回してだ。そのうえで告げたのだ。

「いいな」

「はい」

「わかりました」

彼等は黒い鎧に灰色のマントであった。外見はモンサルヴァートの騎士達と完全に正反対であつた。その彼等がクリングゾルの言葉に応えたのだ。

「それでは」

「今からその若者を」

そして告げる言葉は。

「倒すのだ。いいな」

「はい、それでは」

「今より」

いつして彼等は出陣した。そのうえで城門にいる若者に剣を抜いて向かうのだった。

若者は何故自分が今この城の前にいるのかわからなかつた。それでは呆然としていた。

「どうしてここに？」

「待て、そこの若者よ」

「何の用だ」

まずは門番の騎士達が彼に問つ。

「何故ここに来た」

「言つのだ」

「僕はただここに来た」

こうその暗灰色の壁の前で言つのだった。

「ただそれだけだ」

「それだけだといつのか」

「貴様は」

「そう」

「こう臘に答えた。

「それだけだ」

「では聞こう」

「この城に入るつもりか」

「入らなければならない気がする」

「これも自分ではわかつていなかつた。しかしいつまでもあつた。

「何があろうとも」

「そうか、それではだ」

「我等はここを通さん」

「クリングゾル様のこの樂園は」

「樂園。そうなのか」

若者はそれを聞いてもやはりわかつていない返答であった。

「ここが

「入るのか」

「それではだ」

騎士達は彼に剣を向ける。しかし若者もまた剣を抜きだ。彼等を瞬く間に退けてしまつたのであつた。

「何つ、この男」

「強い！？」

「しかもかなり」

攻撃を受けてからの言葉だった。

「これは何があつてもだ」

「通すわけにはいかない」

「待て」

「そこにいたのかっ」

ここで城の中から他の騎士達も現われた。そうしてだつた。

それぞれ剣を抜いて若者に襲い掛かる。だが若者はあまりにも強く彼等は退けられるばかりだ。気付けば騎士達は全て傷を負つてしまつた。

まっていた。

「くつ、何といつ」

「これは」

「中に入れば」

ここでまた言つ若者だつた。騎士達は城の中に退いていく。

彼はそれを追つように城の中に入った。するとそこは様々な熱帯植物が豊かにあり紅や緑の花々が極彩色の世界を作つてゐる。そうした場所だつた。

アラビアのそれを思わせる城であつた。その城の中でだ。彼は呆然とその城の中を見回していた。するとその不思議な園に出て來たのは。

「門から誰か來たわ」

「やけに騒がしかつたけれど」

「私のいとしい人達を傷つけたのは」

「貴方だといつのね」

その紅や緑の透き通る服の女達が出て來たのであつた。そのうえで彼の周りに集まつてきて言つのであつた。

「貴方が私達のいとしい人を傷つけた」

「その貴方は一体

「誰だといつの?」

「僕は」

若者は彼女達にも要領を得ない返答で返したのだった。

第一幕その四

「何なのだ」「貴方自分がわからないの?」「若しかして」「僕は何だ」「やはりこうした返答であった。
「何だというのだ?」「呆れた。自分で自分がわからないなんて」「馬鹿じやないかしら」「全く」

女達はその彼を取り囲みながらそれぞれ呆れた顔で言った。
「自分のことは自分が一番わかっているのではなくて?」「それでわからないなんて」「筋が通らないわよ」「僕は」「僕は」

また言う彼であった。

「何なのだ?」「何なのかじやなくて」「貴方は何なの?」「私達にとつて」「何なのとはどういうことなんだ?」「若者には全くわからない話だった。」「それは」「貴方わからないの?」「そういうことが」「何もかも」「わからない」「実際に何もわからなかつた。

「僕には何も」

「駄目だわ、これででは」

「そうね。この人何もわからない」

「愚か者ね」

「完全にね」

「僕は愚か者」

そう言われてあることを思い出したのだった。

「あの城でも言われた」

「ねえ貴方」

「そもそも誰なの?」

「一体誰なの?」

「わからない」

ここでも同じ返答だった。

「僕は誰なんだ」

「よくこんな人がこの中に入つてこられたわね」
「幾ら何でも何もわからない人が」

「全く」

女達もこう言うしかなかつた。

「そもそも誰なのか」

「それさえもわからない」

「それにしても」

しかしここで彼はふと言つた。

「はじめてだ」

「はじめてって?」

「何が?」

「どういうことなの?」

「こんなことははじめてだ」

「いう言ひのである。

「こんな奇麗な連中を見たことは」

「私達みたいね」

「そうね」

「それはわかるわ」

「彼等もわかることではあった。」

「まあ私達はね」

「こうしてクリングゾル様にお仕えして」

「楽しむのが仕事だからね」

「そうよね」

「それでだけれど」

「ここで女達は若者に對して問うた。」

「貴方は別に私達をやっつけに来たのじゃないのね」

「それは違うのね」

「そうなのね」

「僕はもう勝手に何かを斬つたり射たりはしない」「
グルネマンシの言葉を愚直に聞いてのことなのだ。

「それはもう

「それなら一体

「それなりいけれど

「何をするの?」

「僕は君達にとつて何なんだ?」

「これはわからなくて当然だつた。」

第一幕その五

「一体

「だからこちらが聞きたいけれど

「そうよ。何なの？」

「貴方は誰なの？」

「わからない」

また同じ返答だった

「僕は誰なんだ」

「何もわからないのね、相変わらず

「けれどこの子って」

「そうよね

ここで彼女達も気付いたのであった。

「顔は奇麗で」

「背も高いし身体もしつかりしてるし」

「いい顔してるわよね

「そうよね

「好みよ

「ねえ

「いいかしら

「ちょっとね

「ちょっとって？」

若者は戸惑いながら女達に応えたのだった。

「何があるっていうの？」

「何があるから尋ねるのよ

「いいかしら、それで」

「こっちに来て

「遊びましょ

「遊ぶ」

そう言われてもあつた。さよとんとするだけの彼であつた。
そのうえでだ。また呆けた顔になつて彼女達に問つのであつた。

「遊ぶって何を」

「まさかそういうの?」

「まさかそうしたことも」

「何一つとして」

「香りがする」

若者にもこれはわかつた。

「君達からもい香りがする。これは」

「そうよ。私達の香りよ」

「それなのよ」

「それはわかるのね」

「わかる」

それはまだと返すのであつた。

「けれど僕は」

「まあそれならいいわ」

「わかつたのならね」

「さて」

それを聞いてまた話す女達であつた。若者の周りで賑やかに踊つてさえいる。そうしながらさらさら話をしていくのであつた。

「いいかしら」

「遊ぶことを知らないのなら教えてあげるわ」

「私達がね」

「教える」

その言葉もわからなかつた。

「何を教えてくれるんだ、いや

「いや?」

「何なの?」

「教えるって何なんだ?」

それもわからないのであつた。

「何を教わればいいんだ、僕は」「だからね。それはね」

「つまりはね」

「聞いて覚えることなのよ」

「感じ取つてもね」

「聞いて覚えて」

言葉をそのまま反芻する。

「そして感じ取る」

「そういうことよ」

「わかったかしら」

「わかつてないみたいだけれど」

「わかった」

一応はこう答えた若者だつた。

「それじゃあ」

「ええ、それじゃあ」

「いいわね」

「遊びを教えてあげるから」

「君達は花なのか？」

若者はここでも感じ取つたままで答えた。

第一幕その六

「まさか」

「花の美」

和道口有作與方

第三回 おとづれの波音

「わかってくれたわね」

それじゃあたけれど

「サウナ遊園地」

「待ちなさい」

しかしでありますた
ここで声がしたのだった

「ペレジワアル

若者はその声が出した言葉に反応した。

確かその名前に

「アーティストの心」

「ふう」とを思い出したのである。

卷之三

ପରାମର୍ଶ

— そう、御前は今は上

「こう言つてであつた。クンドリーは髪をとかし整え化粧をし紅の薄い見事な服を着てだ。頭に顔を出してヴェールをしてだ。若者の

前に出て来たのだ。

〔8〕 おだやか うみの まこと

一それは何故

「すぐにわかるわ」

こう言つてであつた。周囲に顔を向けそつとして言つのであつた。

「御前達は」

「私達は？」

「それは？」

「離れるのよ」

そうしろといつのだ。

「いいわね」

「離れる？」

「けれど」

「今は」

「離れるのよ」

そうしろといつのである。

「わかつたわね」

「仕方ないわね」

「貴女には逆らえない」

「だから」

「呼んだのは？」

「清らかな愚か者」

それだというのだ。

「それがパルジファル」

「パルジファル・・・・・・

「御前の父ガムレットがアラビアで死んだその時」

「これも若者の知らないことだった。」

た。

そしてであつた。彼女達は去り一人だけになつた。若者はあらためてクンドリーに對して問うのだつた。

「名前をない僕を呼んだのは御前なのか」

「そうよ。私が呼んだのは」

「呼んだのは？」

「清らかな愚か者」

それだというのだ。

「それがパルジファル」

「パルジファル・・・・・・

「御前の父ガムレットがアラビアで死んだその時」

「これも若者の知らないことだった。」

「御前の母は御前にじつを付けたのだ」

「名付けた」

「さうよ。まだ自分の中にいる御前にね」

「そうしたというのである。」

「私はそれを教える為にここに来た」

「この城に」

「呼ばれたが御前に会ひ為に今この城に来たのよ」

「こう若者に語る。」

「僕の為に」

「私の國は氣が遠くなる程遠い場所にある」

「それは時間なのか?」

「モンサルヴァートに入った時のグルネマンツの言葉を思い出して
であった。」

「時間でなのか?」

「時間でも空間でもよ」

「両方だというのだ。」

第一幕その七

「じゅうじゅも。そして私は
「御前は？」
「多くのものを見てきたわ
「今度はこう話すのだった。
「まだ子供の御前が母の胸にすがつていね」といふも
「母さんが」
「そして」
クンドリーの言葉は続く。
「ものを言ひはじめた時もね」
「そんなことは全く覚えていない」
「あんたが覚えていなくとも私が覚えている」
「そうなのか」
「そう。心の悩みを持ちながらも」
これは若者の知らないことだった。だがクンドリーはそれをあえて言つてみせてそのうえで話したのである。それも彼女の考えの中であつた。
「ヘルツホライデも自然と笑顔になつたもの」
「そうだつたのか」
「御前はお前の母の楽しみで」
若者にさらに話していく。
「彼女が苦しい時も御前は楽しく笑い彼女はそれを見て笑い
「それでどうなつたんだ？」
「彼女はその御前を優しく撫でて寝かせていた」
「母さんが」
「御前を田観めさせたのは母の熱い涙の露だつた」
「涙？」
「そう、涙よ」

それも話すのだった。若者の知らないことだと知りながらもだつた。

「御前の父を失った悲しみと御前への愛で」

「父さんと僕の」

「御前には父親と同じ悲しみをして欲しくなかつた」

「だからなのか」

「武器を遠ざけ戦いから引き離し」

これがその母のしたことであつたのだ。

「世間から引き離してそうして育てていた」

「父さんの様に死ぬことがないよ」

「夕方遅くまで帰つて来ない時も心配で泣き御前が帰つて来て微笑み」

あやこさうしたところである。

「そして御前がいなくなつた時」

「ここまで聞くその時に」

「やう、その時に」

またにその時だとこゝのだ。

「母が嘆き悲しんだ声や心を傷めた叫び声は聞かなかつたのね」

「知らなかつた」

「彼女は昼も夜も待ち遂には」

「遂には？」

「深い悲しみは心を悩ませて」

「そして？」

「その中で死んだのよ」

そこまで聞いてであつた。若者は今ある感情を感じた。その感情

は。

「悲しい・・・・・」

「悲しいといふのね

「悲しい・・・・・」

項垂れた顔での言葉だった。

「僕はその時何をしていた

「あの城に向かつていた」

「そして懐かしく優しい母さんを死なせた」

「こう言ってその場に崩れ落ちてしまった。

「僕が」

「しかしそれは」

「僕はふらふらとして自分の母親を死なせてしまった。大切な母さんを」

「その苦痛の思いをまだ知らなかつたその時は」

「クンドリーはこう彼に話した。

「優しい慰めはなかつた」

「なかつた・・・・・」

「しかし御前は今悲しみを知つた」

「まずはその感情だといつのだ。」

「そして」

「そして?」

「後悔をしている筈」

「今この悲しみと共に僕を苦しめているものが」

「そう、それが後悔」

「まさにそれだというのだ。」

「悲しみや苦しみの思いは」

「その思いは?」

「愛が御前に捧げてくれる慰めで」

「この言葉を出すのであつた。」

第一幕その八

「償えばそれでいい」

「けれど僕は」

若者は崩れ落ちたまま言った。

「何故母さんを忘れたんだ」

「御前の母をか」

「そう。何故忘れたんだ」

このことを嘆き悲しんでの言葉だった。

「何故なんだ、そして今思い出した」

「立つのよ」

クンドリーはその若者にまた告げた。

「立てばいいわ」

「立つ」

「そう、まずは立つ」

そうじろといふのである。

「御前は今何を感じているのかしら」

「ぼんやりとした愚かさが

まずはこう答える若者だった。

「僕の中にあることを

「それをなのね」

「それが」

「懺悔をすれば罪は後悔となつて消える」

母が今言つのはこうのことだった。

「悟りが開ければ愚かさも分別に変わる」

「分別・・・・・」

「愛といつものを知るといふ

それをだといふのだ。

「愛を」

「そう、愛を」

何時の前にか彼の前に来ていた。

「御前の母の愛が御前の父に注がれたその時に」

「その時に?」

「御前が生まれた」

その時にだというのだ。

「御前にその身体や命を授けてくれたのも愛であり」

「愛が」

「そう、それが」

まさにそれがだというのだ。

「愛に出会えば死も愚かさも逃げ出すより他はない」

「愛が」

「その愛が今日御前に捧げるものが

それを捧げようというのだ。

「御前の母の祝福の最後の挨拶としてのおの愛の最初の口付けな
だから」

こう言つてそれで彼に顔を近付けてだ。そして彼の唇に口の唇
を押し付けた。そのうえで接吻をしたのであつた。

長い接吻であつた。それが終わつたその時だつた。若者は何もか
もが変わつたのであつた。

そしてだ。表情を一変させてだ。彼は言つた。

「パルジファル・・・・・・

「名前を知つたのね

「これが私の名前だな

まさにそれだというのだ。

「私の名前だ」

「そして他には」

クンドリーは彼、パルジファルにさう聞いた。

「あるというの?」

「アムフォルタス王」

王の名前がだ。自然に彼の口から出たのだ。

「あの傷が私の心中で燃えている。あの嘆き声が私の中で響いて

いる」

「それを感じているのね」

「救われるべき人だ」

「それが王なのだという。」

「あの傷口から血が流れ出るのを見た」

「それを」

「それは傷口ではない。傷口なら流れ出る」

パルジファルが話す。

「心の中が火の様に燃え上がる」

「心で感じているのね」

「憧れ、私の五官全てを捉えて強いる憧れ。愛の苦しみ」

それを捉えての言葉だった。己の中だ。

「私の身体が震えて慄く。罪深い欲望のうちに
そして言うのであつた。

「眼差しが救いの聖杯を求める」

「するとどうなるの?」

「神々しくも和やかな救済の喜びを感じる」

「それをだといふのね」

「そう、感じる」

まさにそれをだといふのだ。

第一幕その九

「感じ取りだ。神聖な血が燃えることも。全ての人々の心を震えさせ」

「心を」

「そう、これを」

「そう話してであった。

「胸の中だけに消える気配がない。主の嘆きが」

「私はあの時に」

「その嘆きだ」

「クンドリーが何を言いたいのかもわかつてていたのである。

「その嘆きこそがだ」

「わかつてているというのね」

「汚された槍の嘆きもまた」

「それもだ」というのだ。

「罪に汚れたる手より我を救え」

「それが槍の声」

「わかせつてている。その嘆きは恐ろしいまでに強い」

「今この彼には全てがわかつてているのだった。

「私の心にまで呼び掛けてくる。しかし私はそれに気がかなかつた」

「今気付いた」

「主よ、慈愛の父よ」

「こう話していくのであった。

「罪深い私はどうしたらこの罪が償えるのでしょうか」

「私を」

「御前を?」

「もうこのまま去りたい」

クンドリーは彼の前に来て話すのだった。

「救われたい。神の御力で」

「まだだ」

しかしであった。パルジファルは彼女のその言葉を拒むのだった。
そのうえでだ。彼はクンドリーに告げた。

「御前は罪を犯した」

「罪を」

「そう、その罪によつてだ」

「クンドリーに話すのだった。」

「御前は王を惑わしたな」

「それも知つている」

「全でがわかつてきたのだ」

「全でがわかつてきただのうである。」

「その唇も首筋も使つて王を惑わしたな」

「しかしそれは」

「全てを使い王を今の苦しみに誘つたのだったな」「
クンドリーを厳しい田で見据えながらの言葉だった。

「それも知つたのだ」

「御前が心の中で王の苦しみを感じ取つた」

「それは事実だ」

「ならば私の苦しみも」

切実な顔で「うつ告げるのだった。

「私を救う為に」

「せよといふのか」

「そう、私はかつて主を待つた」

「そうだったな」

「しかし彼が丘に向かうその時に」

「遙かな過去の話であつた。

「私は彼を罵つた。私への救いはまだだと告げた彼を」

「そして呪いを受けたのだったな」

「死のうと生き続けようと寝ても覚めても私を責め苛む」

まさにそうだといふのだ。

「私は未来永劫続く」の苦しみの中での主を見た。私を救おうといふ

「いつその主を」

「見たのだな」

「そして私に笑顔を向けてくれた」

「それはあつたというのだ。」

「しかし」

「しかし？」

「その度に私を拒みそのうえで私は田観める」

「そうしてだというのだ。」

「私は二つの世界の中を彷徨い笑い叫び怒る」

「泣けはしないな」

「泣くことは許されない」

「全てを彼に対して話すのだった。」

「暴れたり狂つたりしながら暗い夜に包まれ続け」

「そうして生きてきたな」

「悔い改めて逃れることもできなかつた」

「その時からだというのだ。」

「私が焦がれ死にたいまでに憧れたあの主、愚かにも嘲つたあの主」

「の方は全てを知つておられた」

「あの主の下に。これからは」

「まだだ」

「しかし」でまたこのことを告げるパルジファルだった。

第一幕その十

「私の使命には御前を救う」ともある
「それなら」
「だまだだ」
「こう言つて今は拒むのだった。
「それは御前がその憧れから顔を背けたその時にだ」
「その時にといふのね」
「御前の悩みを癒す慰めをもたらすのはその悩みが湧き出る泉では
ない」
「では何だといふの？」
「まずはその泉が閉ざされてだ」
「それからだといふのだ。」
「御前はそれからでないと救われはしない」
「救われない・・・・・」
「人々が嘆き悲しみながら思いを焦がしている泉は別なのだ」
「別だといふの？」
「そう、別だ」
「まさしくそうだといつのだ。
「多くの者がいる」
「多くの者。まさか」
「私には行かなければならぬ多くの世界があるのだ」
「私が見てきた世界以外にも」
「時間も空間も超えて」
「そうしたものを全てだといつのだ。
「全ての愛に救いをだ」
「まさか遠く東の果ての国にも」
「行く。新しい国にも古の国の都にもだ」
「彼はこの地にありながらそしたものも見ていくのだった。

「階級により引き裂かれる愛も立場によつて別れなければならない
よつにならうとしている愛もだ」

「そうした全ての愛を」

「私はこれから見て救いに行くのだ」

「そうするというのだ。」

「全ての世界を巡る。それではだ」

「それでは」

「誰がその泉の本質をはつきりと明らかに知つてゐるのか
それも言うのだ。」

「御前は唯一の救いの真の泉の本質を知つてゐる筈だ」

「では」

「あらゆる救いをその手から逃し世界の妄念の闇に包まれつつ最高
の救いを熱烈に願う」

「それが誰かというのだ。」

「永劫の罪の泉にばかり思いを焦がしてゐるな」

「それが私だと」

「御前が救われるのはだ」

「その時が何時かも話される。」

「最後の時だ」

「けれどそれでも」

「まだだ」

「今それをしようとはしないのだった。」

「それは変えられない」

「私が笑つたことで報いを与えてくれたあの人」

「そのことも話すのだった。」

「あの呪いが今も私を責め苛むといふのに」

「それも運命なのだ」

「こう言つてそれを拒み続けるパルジファルだった。」

「御前のだ」

「ではこのまま」

「待つのだ。御前の時は必ず来る」

こう最後に言つた。そしてだつた。

城壁の上にクリングゾルが姿を現わしてきた。その手にはあの槍がある。

その槍をパルジファルに突きつけながらだ。彼に對して告げるのだつた。

「そこを動くな」

「クリングゾルか」

「そうだ。貴様を倒す者だ」

怒りの目で彼を見下ろしての言葉であった。

「この槍でだ。受けるがいい！」

「むつ！」

槍が放たれパルジファルに投げられる。しかしであつた。

パルジファルがその槍を見据えるとであつた。何と槍は彼の目の前で止まつたのだった。空中でぴたりと制止した。

「何つ！？」

「この槍は私のものだ」

驚くクリングゾルをよそに彼に告げて槍を手に取つた。

そうしてだ。その槍を右手に持つ。

「この槍にはあらゆるまやかしを消すことができる」

「俺の妖術を崩すというのか！？」

「貴様自身もだ。見ろ！」

その槍で十字を切つた。するとだつた。

クリングゾルも城のありとあらゆるものも消え去つた。そして後に残つたのは廃墟だけだつた。城壁も城も庭も全てが廃墟となつた。

「騎士達もモンサルヴァートに戻る。女達は花に戻つた」

今彼はクンドリーに背を向けていた。しかし彼はその彼女に顔を

向けてだ。

「わかつていよ」

「それは」

「何処で私に出会えるのかを」
こう言って廃墟を後にするのだった。今彼は旅立つたのだった。

第三幕その一

第三幕 聖杯の奇蹟

グルネマンツはある森にいた。今は城を離れ半ば隠者となつていた。彼は簡素な小屋を後ろに今は隠者の服を着てそのうえで静かに森の中の切り株の上に腰掛けている。今は朝である。

その朝にだ。彼は声を聞いたのであつた。

「獸か。違うな」

それはすぐにわかつたのだった。

「この森の獸はあれだけ悲しい嘆き声を出さない。では一体。それに」

声が次第に近付いてくるのがわかつた。

「聞き覚えがあるな。あれは」

そして来たのだった。クンドリーだった。またあの粗野な姿でふらふらとグルネマンツのところに来てだ。そのうえで言つてきたのである。

「戻つて来たのだな」

「ようやくここに」

「長い間見ていなかつたが」

「そうでしたね」

「私は見てはいなかつた」

「そうだといふのだ。」

「随分とな」

「あらゆる場所を彷徨い、そして」

「そして？」

「冬の中の荒れ果てた茨の陰に身を覆われ」

「彷徨つてきたのか」

「そう」

まさしくやうなのだった。

「そしてよつやく」
「今は春だ」

グルネマンツは穏やかな声で彼女に告げた。

「もう冬ではない」

「はい、確かに」

「そして戻つて来たのか」

「それでなのですが」

「それで？」

「城は」

クンドリーはこのこと尋ねてきた。

「どうなりました？」

「少なくともだ」

「ここで首を無念そうに横に振つてみせて言つのだつた。

「もうそなたが骨を折ることはない」

「ないのですか」

「騎士達は戻つた」

グルネマンツはまずそのことを話した。

「クリングゾルの城に彷徨い込んでいたあの者達はだ」

「左様ですか」

「あの男は滅んだのだな」

「はい」

「これはクンドリーも知つていることだつた。

「それはもう

「しかしだ」

「しかし？」

「もうそなたが動く」ともないのだ

「そうなのですか」

「そうだ。だからわしもここにいる」

「う話をのだった。

「我等はこのまま静かに倒れていくのだ

「倒れていくのですか」

「わしもまた。だからいい」

「左様ですか」

「ところでだ」

「ここでグルネマンツは話を一回置いた。そつしてだ。

「聞きたいことがある」

「今度は一体

「来たのはそなただけか?」

「私だけとは?」

「もう一人連れて来たのか?」

「それを問うてきたのである。」

「まさかとは思うが」

「いえ、私だけです」

「そもそもこの城に近付けるのは騎士達や小姓達、そしてそなただけだ」

「いつ言つのだつた。」

「しかもあの姿は」

黒い鎧兜にマントの騎士だった。顔は面で見えない。左手にもやはり黒の楯があり右手には槍がある。その騎士がやって來たのである。

その彼を見てだ。グルネマンツはまずは考へる間にになつてからだ。そのうえで彼に声をかけるのだった。

「ようこそ」

「その彼への言葉だつた。

「道にお迷いなら教えてられるが」

だが彼は首を穏やかに横に振るだけであつた。

「違うといふのか」

それには首を縦に振る彼だった。

「そうか。それではだ」

彼に対してもう一つの言つのであつた。

「わしに御挨拶は控えられるのか
その問い合わせにも首を縦に振るのだった。

第三幕その一

「左様か。しかしだ」

グルネマンツはさりに彼に話す。

「わしはそなはいかん。貴殿が来られた場所は聖地
まさにそれだといふのだ。

「ここにはその御姿で入られる場所ではない故
こう話してであつた。

「しかも今日がどうした口かはご存じないのか
また首を横に振るその騎士だつた。

「左様か。では何処から来られた?」

それにも答えなかつた。首を横に振るだけの騎士だつた。

「わからないか。しかしだ」

だがここでグルネマンツは話した。

「今日は聖金曜日。そして」

そのことを話してそうしてだつた。

「ここでは武具は外してもらいたい。主を傷つけない為に
だからだというのである。

「如何なる武具ももたずその神聖な血を罪深い世の罪を購う為に流
されたのだから」

この言葉を受けるとだつた。騎士はまずは槍を置いた。ただ立た
せただけであったが槍はその場所に完全に立つた。そして楯を置き
兜を外す。するとそこから出て来たのは。

「何と、貴方は」

「お久し振りです」

パルジファルであった。彼は微笑んでグルネマンツにはじめて挨
拶をしてきた。

「貴方とはかなり以前に御会いしましたね」

「まさか・・・・・・」

「はい、私です」

微笑んだままでもた述べたのだった。

「再びここにきました」

「かつて私が出した貴方が

グルネマンツは驚きクンドリーは見ている。その中の言葉だつた。

そうしてだ。グルネマンツは驚きながらセリヒテハツのであった。

「どんな道を辿つてここに。それにこの槍も」

「おわかりですね」

「ええ」

槍を見ているうちにだ。彼は次第に恍惚となつていた。

「その通りです」

「迷いと悩みの様々な道を歩いてきました」

「ここでまた話すパルジファルだつた」

「そこであらゆる悲しみと死、そして喜びと生を見てきました」

「左様でしたか」

「この森のそよぎを再び耳にしました貴方に会えました。しかし

「しかし?」

「ここは何か変わったのですか?」

それを問うのだった。

「何か」

「その前にですが」

「はい」

「誰を訪ねる道だったのでじょつか」

グルネマンツが今度問つのことだった。

「それは」

「あの方です」

パルジファルは遠くのものを見る田で述べた。

「あの方の深い嘆きをかつての私は愚かにもただ聞くばかりでした」

「はい、あの時は」

「しかし私はあの方に救いをもたらすべき者だと思つ次第なのです」「そしてここに」

「その為に多くの道を巡ってきたのでしょ?」

「そしてこの城に戻るまでの道についても言つのだつた。

「遠い島国に入つたこともあればあの温かい永遠の都に入つたこと

もあります」

「あの都ですか」

「そして夜の世界を愛する騎士も見ました」

「彼が見てきたのは実に多くのものだつたのだ。

「それに」

「それに?」

「神々の黄昏も。白鳥の騎士も愛の女神もです」

「話に熱はない。だが確かな言葉で話していくのだつた。

「恋人を歌により得た若者も愛により救われた彷徨い人も

「全てをですね」

「見てきました」

「まさにそうだといふ。

「それに」

「それに?」

「数知れない苦しみや戦いも争いも見ました。私はその中で」

「槍を見た。その聖なる槍をだ。

「この宝を守つてきました。戦いには使わずに」

「そうされてきたのですね」

「槍は汚されませんでした。そして」

「若者はさらに話した。

第三幕その二

「今こゝに聖杯グラールに添うべき聖槍ロンギヌスは戻りました」

「これこそ神の奇跡であり恵みです」

グルネマンツはこゝまで聞いて恍惚となつた。クンドリーもその隣にいる。

「貴方が槍と共に戻られたそのことがです」

「奇跡ですか」

「そして幸せでもあります」

「そうでもあるといふのだ。」

「こゝはその聖杯の聖地です」

「は」

「そして騎士達が貴方を待つてしています」

「このことも話すのだった。」

「貴方がもたらす救いが必要なのです」

「それがだというのですね」

「貴方が前に来られたあの日から」

彼はさらに話した。

「王はその傷と魂の悩みにあがらわれるつひ」

「悲しまれてきたのですね」

「貴方と同じく」

まさにそうだというのだ。

「その中で死を望まれるようになりました」

「遂になのですね」

「そう、遂にです」

「そうなつたというのだ。」

「騎士達の言葉もその姿も王の苦しみを止められず」

「あの聖なる務めもですか」

「できなくなりました」

今のモンサルヴァートのことも話すのだった。

「聖杯は納められたままです。守護者は聖杯を仰ぎ見る限りは死にません」

「はい、それは」

「ですから見ることを止められてそのまま死を迎えることがされています。

「何といふことか」

「我々もです」

そしてグルネマンツ達もなのだった。

「その中で弱り衰え聖戦も絶えています。ただこうして城や森の中にその身をつなだれさせております。先王もまた」

「ティートウレル王もですね」

「はい、あの方はもう」

グルネマンツの語るその顔が殊更悲しげなものになつた。

「やはり人です。我々もまた」

「私があの時気付いていれば」

パルジファルはそれを聞いて深く嘆いた。

「この様なことにはならなかつたというのに」

「しかしそれは」

「愚かだつた」

その嘆きは続く。

「何も知らなかつたことは罪だつたのか」

「いえ、そうではありません」

だがグルネマンツはここで彼に告げた。

「それはです」

「違うと」

「全ては主のお導きなのです」

「あの尊い主の」

「左様です。ですから」

そう話している間にだ。クンドリーは水を入れた鉢を持って来て

いた。

そしてそれをパルジファルにかけよつとする。しかしであつた。

グルネマンツがそれを止めた。そのうえでの言葉であつた。

「待て」

「何故？」

「そうするのではない」

彼女に穏やかに話すのだった。

「神聖な泉そのものがこの方にだ

「この方に？」

「水を受けさせて回復させるといつことだ」

こう語るのである。

「だからだ」

「それで私は

「それにだ」

グルネマンツはさりと話す。

「今日のうちにここの方が何かを果たすのではないか」と思つたのだ

「何をですか」

「その神聖な務めを

また言つ彼だった。

第三幕その四

「それで今少しの汚れも起じいらなによつて」「どうされるおですか？」

「長い迷いの旅路の塵を洗い落として差し上げよつと想ひ」

「わかりました。それでは、

「ではこちらへ」

グルネマンツは彼をある場所に導いた。そこは泉だった。その泉のほとりに来るといで彼のその鎧を外していく。そしてその黒い騎士の装束の姿を見た。そのうえでだつた。パルジファルは自分から話してきた。

「それでなのですが

「はい」

「今日のうちに王のところに案内して頂けるでしょつか」「こう言つてきたのである。

「それは駄目でしょうか」

「いえ、無論です」

グルネマンツはそれは言つまでもないと答えた。

「是非共。それは」

「そう言つて頂けますか」

「それです

「それに?」

「今日はその先王の葬儀の日なのです」

「このこともパルジファルに話した。

「そしてその今日に」

「王が聖杯をですね」

「その通りです。御子息の罪故に倒れられた先王の為にも」「尊い御身を清める為に王は務めを通じて罪をあがらわれるといつ出すと話すのである。

「尊い御身を清める為に王は務めを通じて罪をあがらわるといつ

のです

「では今から

クンドリーはその間に彼を清めていた。服の上からであつてもだ。またグルネマンツは彼女が水を汲みに行くその間に彼の身体を清め服を替えていた。何時しか彼は騎士の白銀の見事な礼装になりそしてマントも羽織っていた。その姿になつていく中でクンドリーに声をかけるのであった。

「御前は私を清めてくれた」

「はい」

「今度はだ」

その厳かな言葉で語つていく。

「旧知の懐かしい手で頭を潤してもらいたい」

「それでは

グルネマンツが出て来てだ。片手で泉の水をすくいパルジファルの頭にかけた。そしてそのまま彼に告げるのであつた。

「清らかな人が純らかな水で祝福されるよう」

「有り難き言葉」

「あらゆる罪の憂慮の思いがこゝにして御身から消え去る様に

「これを」

クンドリーは聖油を取り出してそれをパルジファルの身体にかけていく。忽ちのうちに彼のその身体をぐわしい香りが包んでいく。

「貴方はです」

「私は」

「あの方を救われてです」

グルネマンツは彼にこのことを話すのだった。

「そしてです」

「私はそれで終わりではないと

「そうです。それからなのです」

今語るのはこのことだった。

「王の悩みを救われ

「そうして」

「その最後の重荷をどうかお外し下さい」

「の方方が望まれるのなら」

「も一もないといつた返答だった。

「喜んで」

「そうして頂けますね」

「是非共。そして」

「そしてですか」

「参りましょう」

「こう彼に告げるのであった。

「その聖なる場所へ」

「わかりました。それでは」

そしてであつた。パルジファルは周りを見回してだ。また言つうのであつた。

「それにしてもです」

「何か？」

「今日は野原が何と美しく見えるのか」

周りを見回しての言葉だつた。その朝の光に輝く森や草地、そして泉をだ。そうしたものを見回しながらそのつえで恍惚として語つたのである。

「前に私は不思議な花の群れに出会つた」

「花のですか」

「その美しさを見た」

「こう語るのだった。

第三幕その五

「しかしこれ程まで和やかで優しい草や花の数々は見たことがない」

「一度もですね」

「旅の中でもなかつた」

まさにそうだといふのだ。

「全てのものがこれ程無邪氣に好意ふかしく香つていたこともなければ」

「そしてですね」

「これだけ可愛らしく親しげに語り掛けてきた」とはない
これが彼の言葉であつた。

「今までは

「これこそがです」

グルネマンツはその彼に対してまた語つた。

「聖金曜日の靈験なのです」

「その日が

パルジファルは彼の言葉を聞いてまた語つた。

「この上ない苦痛の日故の靈験かと思つと」

「どうなるところのうづか」

「心が痛む」

「そうだといふのである。

「今日とこゝの日はおよそ咲きこじるものが

「はい」

「息を吸い命を持つ全てのものが」

「さりに話していく。

「ひとえに嘆き悲しんで泣く日が思える」

「それは違います」

だがグルネマンツはそれは否定した。

「罪深い者達の悔悟の涙がです」

「それがなのですね」

「そうです、それがです」

「その言葉が続けられていく。

「野原を潤しこの様に草木を茂らせ」

「それによつてですね」

「その通りです。今こそあらゆる生あるものは」

「パルジファルに対し恍惚として語る。

「主の恩恵の証に出会つことを心楽しく待ちながら祈りを捧げようとしています」

「それが今日の日だと」

「そうです、今日です」

「さらに話すのであつた。

「彼等は十字架の上の主のお姿をそのまま持つことはできません」

「それは」

「そうです、それはできません」

「いつも彼に語る。

「しかしです」

「それでもであつた。彼にさうして話すのだった。

「救いを受けた者を仰ぎ見ることになりますがそれは」

「それは」

「主から救われた者は罪の重荷や恐怖の境地から脱した者のことです。そして神の愛の犠牲によつて純潔または幸福な思いのする者です」

「その言葉がさうして続く。

「野の草や花も」

「さりに言葉を続けていくのだった。

「今日は人の足元に踏みにじられないことに気付いていますし」

「それもまた」

「左様です。それに」

「言葉を続けていく。まだであった。

「神が気高い労苦によつて人を哀れみ人の為に悩まれた様に」

「それ故に」

「今日は人もその恩愛の心で踏む足も穏やかに草花を労わるのです。こういうことをまたあらゆる生き物が有り難く思うわけであり」

パルジファルは彼を見てその言葉を聞き続いている。

「その辺りに咲いていてです。枯れていくものも皆感謝の思いを持つていますがそれも罪を清められた自然全てが今日こそ無垢無罪の日を迎えるからです」

クンドリーはグルネマンツのその話の間恍惚としてパルジファルを見ている。そして真剣かつ平静な顔で目に涙をたたえながらであった。

第三幕その六

そのパルジファルがだ。語るのだった。

「かつて私に微笑みかけてきた花達も全てしおれてしまつた」

「花達が」

「あの花達も今日は救いに憧れているのではないだろうか」

「今は」

「そうだというのですね」

「クンドリー、そなたの涙も」

今度はクンドリーに顔を向けての言葉だった。

「祝福の露になつた」

「私の涙が」

「そう、それが」

「う語るのであつた。

「見るのだ。野は微笑んでいる」

「そういえば

「わかるな」

「はい」

その周りを見たクンドリーへの言葉だった。

「それが」

「よく」

「そういうことだ。全てが清められるべきなのだ」

そしてだつた。遠くから鐘の音が聴こえてきた。グルネマンツはそれを聴いてまた言つた。

「午だ」

「午になつたのか」

「そうです。ですか」

「行くといつのだな」

「そうです。それでは」

「こうしてパルジファルとクンドリーを導いていく。そうしてだつた。空間がそのまま時間になりだつた。彼等はそのまま宮殿の中に入つていた。あの広間にだ。そうしてそこにあの時と同じまま王がいて騎士達や小姓達もいる。そのうえで聖杯の箱もある。だがそれだけではなくだ。棺もあつた。

その棺が誰のものかは言うまでもなかつた。騎士達はその中央に置かれた棺も見てそのうえで悲しい声で語つていくのであつた。

「厨子の守れる聖杯を」

「聖き務めに待ちきたりしが」

「暗き棺が守るのは誰の為か」

「悲しく担われるのは誰の身か」

「この語つていくのだつた。

「悲しき棺は勇士を守り」

「即ち聖なる力を守る」

「かつて神への奉仕に尽くせり」

「先王を導かれる」

「その言葉が続く。

「神に守られ神を守りし」

「先王を倒したのは誰か」

「老いの重荷に敗れたる死だ」

「聖杯を仰ぐことを阻まれし身に」

「聖杯の恵みを仰ぐのは」

「先王に拒まれるのは何者ぞ」

「こう話されていく。

「それは御身等の伴いきたれる者」

「罪深い守護者」

「今一度これを限りに務めを果たせん」とを

「守護者自ら望めば」

「この度を限りに」

「今こそ」

「そうしてであった。さうに話すのであった。

「悲しむべき聖杯の守護者」

「我等はこれを最後に貴方に務めを促す」

「今を最後に」

「これ限りに」

「そうだ」

王は身体を起こし弱々しい声で語る。その声は以前より弱いものだった。

「悲しくも辛いこの身の上に禍いあれ」

「こう言ってであった。

「できればそなた等の手で死なせてもらいたい。死こそが私の罪深さに対する最も寛容な務めだ」

そして棺を見てでだった。

「父上も私の為に。勇士の中でも一際気高く祝福された勇士」

それが彼だというのだ。

「かつては天使達からも敬意を表された純潔至極な父上」

その悲しい言葉が続く。

第三幕その七

「ひとえに死を願つた私が何と御身を死なせたとは。今は神々しい輝きに包まれて親しく主を仰ぎられた父上よ、今一度主の祝福が騎士達を蘇らせるものならば何とぞ主の聖なる血潮にとつて皆があらたな命を恵まれるよう」

「王よ、それは是非

「御願いします」

「最後に」

「父上よ、御冥福を」

まだ父王に対しては言ひ。深い嘆きの顔で。

「そして私は今日を限りに」

「その様なことは仰りはず」

「それは何どぞ」

「わかつてゐるが。だが」「しかしながら」

「私はそれでも、死こそがこの心臓を蝕む毒を癒してくれるもの。父上」

また父の棺を見ての言葉になつていた。

「何卒主に我が息子に安らぎを『ええええとお伝え下さ』」

「では箱を」

「そしてお務めを」

また言う騎士達だった。

「どうかここは」

「御願いします」

「わかつてゐる。だが」

王は小姓達が出してきたそれを開ひつとする。しかしであった。途中で手を止めてだ。そのついでの言葉だった。

「駄目だ。最早私には」

「王よ、しかし」

「それはです」

「だが私は」

それでも言う彼だった。

「もうこれを開いて生きることは

できないと言われるのですか」

「それは」

「最早私にはできはしない」

頃垂れた顔で語った。

「できれば私には死を。今すぐその癒しを

「しかしです。それは」

「我等には」

「頼むのだ」

「こう言つばかりになつてゐた。

「そして他の者がだ。聖杯を」

「いや」

しかしであった。ここでパルジファルが出て来たのであった。そのうえで王の前にやつて來た。その右手にはあの槍がある。グルネマンツとクンドリーは騎士達の中にいる。

「それには及ばない」

「貴殿は」

「私は遂に辿り着くことができたのだ」

「その槍を静かに携えての言葉であった。

「貴方の御前に」

「私の」

「だからこそこれを

その槍を王の傷口である脇腹に当てた。するとであつた。

それであの赤かつた傷口が消えていった。忽ちのうちにだ。そして王の顔にも生氣が宿つた。

「おお・・・・・・・」

「そして」

右手の槍を王の傷口から離しそのついでの言葉であった。

「幸あれ」

「幸が」

「そう、貴方に」

「ひつ王に告げたのである。

「罪を贖われ清められよ」

「そして」

「お務めは私が代わりその憂いも悩みも私が背負おつ
「我が憂いも悩みも」

「共悩の最高の力と至純な知の力が何も知らないこの愚か者にその
憂いを共にさせてくれたのです」

「こう言い終えると彼は部屋の中央に来た。そのうえで周りの騎士
達に告げたのである。

「今この槍を」

「おお・・・・・・・」

「その槍こそは」

「そう、今この聖槍を貴方達のところへ持ち帰つたのだ」

「己が高々と掲げるその槍を見ていた。それは全ての者がであった。

「今ここに。傷口を塞いだこの槍から再び聖なる血潮が滴り落ちて
きている。今奇跡が起こつたのだ」

「そうだ、奇跡だ」

「奇跡が再び」

誰もがそれを言つ。そして彼は自ら聖杯に近付いく。すると箱は
自ら開き聖杯が出て來た。それを手に取り高々と掲げる。神々しい
光が全てを照らすのだった。

「聖杯は光を放つべきもの。全てを救う為に」

「聖杯のこの上ない救いの奇跡を」

「今こそ救いを」

「全てに対して」

騎士達もそれに唱和する。クンドリーは静かにパルジファルと聖杯の前に出てそのまま見上げたまま倒れ事切れた。その顔には満ち足りた笑みがあつた。

アムフォルタス王とグルネマンツは彼女の亡骸を運ばせるとパルジファルの前に跪いた。騎士達も小姓達も彼を囲んで一人に続く。聖杯の光が彼等を照らし続けていた。

舞台神聖祝典劇　パルジファル　完

2010・3・2

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n4859p/>

舞台神聖祝典劇パルジファル

2011年4月28日00時58分発行